郷土史への扉

# 西郷隆盛と霧島

## 霧島に残る西郷逸話（国分・牧園）

その5

今年は国内最後の内戦「西南の役」が終結し、「西郷隆盛」が没して一四〇年の節目の年です。

前回は西郷南洲翁の日当山での逸話を紹介しました。今回は国分、牧園に残る逸話を紹介します。

### 国分川内（かわうち）「西郷（せご）どんの力石」

西郷どんが国分地方に狩りに来たときの宿は、大抵は川内の町田次郎兵衛宅でした。次郎兵衛は※1清涼寺の住職で、身の丈は六尺二寸（一八八チセン）もある巨漢。西郷どんの狩りの案内人でもあり、話し相手でもありました。

西郷どんが来ると、近くの青年が大勢集まってきて、狩りの話をしたり鹿児島の話を聞いたりしました。中でも力自慢の青年は相撲を取ったり、石を持ち上げてみたり、力比べをよくしたといいます。

西郷どんは若者たちと一緒になって、よく遊びました。そのとき力比べをした石が、今も町田さん宅の庭先に残っています。重さは約二〇貫目（約七五キロ）で、縦横三〇チセンの丸い石です。

西郷どんの力石（国分川内）

### 牧園踊（おどり）「貫（ぬき）」

天降川の中流域の真米（まごめ）には、大きく蛇行する河川を横切るように洞窟があり、その中を川が流れています。これは恐らく、火山噴火や地震によって大地に亀裂ができ、その亀裂に河川の水が入り、長い年月をかけて洞窟が広がってできたものと考えられます。地元ではこれを「貫」と呼んでいます。

この洞窟の壁面には人為的な石鑿（いしのみ）の痕跡が残され、出口（下流側）付近には岩石を彫って作った用水路があります。

これは、この地域が火山活動によってできた※2岩石（火砕流堆積物）でできており、軟らかくて加工し（彫り）やすい特性をうまく用いたものです。

地域の古老の話によると、この洞窟を用水路にして水田を作ろうと提案したのは西郷どんだった、といわれています。提案した時期ははっきり分かりませんが、恐らく薩摩藩内の農業を見回る郡方（こおりがた）をしていた頃か、晩年霧島で過ごし狩りの途中に真米に立寄ったときではないかと思われます。

当時の薩摩藩では火山灰土（シラス台地）による水田不足や財政難が悩みでした。水田開発が緊急な政策の一つで、当地のような山間部であっても新田開発の動きがありました。西郷どんが郡方として農民の実情をよく知っていたことから、このような提案があったものと思われます。

（文責＝鈴）

西郷どんの貫（牧園町踊）の外観。大地の亀裂が河床にも残っている（白い部分）

西郷どんの貫の内部

※1　記録がなく所在は不明。

※2　約三万年前に起きた姶良カルデラの噴火によって堆積した火山灰が、熱と重さによって溶結凝灰岩となったもの。

---

連続講演会

## 西南の役140年記念事業

市内に残る古戦場跡や西郷隆盛との関わりについて、5回連続で講演します。

### ■第1回　西郷隆盛と郷中教育

- 日時＝5月25日（木）午後1時30分から
- 場所＝隼人塚史跡館研修室
- 講師＝社会教育課職員
- 定員＝45人（申し込み多数の場合は抽選）
- 参加料＝300円
- 申込期限＝5月19日（金）

問・申＝社会教育課　☎(64)0708